

Title	「一枚の絵から」
Author(s)	高橋, 綾
Citation	臨床哲学のメチエ. 2001, 9, p. 37-38
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/12442">https://hdl.handle.net/11094/12442</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

テーマ：「一枚の絵から」

進行役：高橋綾、サブ進行役：本間直樹

研修室Aでは、「一枚の絵から」と題して、一枚の絵を見るという共通の経験をもとにしてダイアログを行った。(この芸術作品をテーマにしたダイアログは、子供のための哲学でも用いられており、またMOMAの講師であるアメリア・アレナスさんも「なぜこれがアートなの」という本のなかで、美術館で作品をただ鑑賞するだけでなく、その作品のまえで語り合うという、観客を巻き込んだギャラリートークの試みを紹介しており、今回はそれらを参考にこの企画を立てた。)

研修室Aの参加者は15人ほど、男性はちらほらで、20代～40代の女性が多かった。会場も研修室Bのほうよりは狭かったので、お互いの言葉や表情の動きが確認できるちょうどよいくらいの人数と広さだったと思う。

まずはじめに、今回は(最近よく見かける)奈良美智氏の「こども」の絵を用いることを発表し、絵を見て「感じた」ことをまず参加者それぞれが「言葉にし」、そしてそのお互いの言葉を交換し、どこが同じで、どのように異なっているのかを明らかにして言葉を「共有する」ことが重要である、とはじめに説明した。

まず絵を見てもらい、各人が絵を見て思い浮かんだこと、感想を一つの「キーワード」というかたちで出してもらった。印象を言葉にするということはなかなか難しいかと思われたが、たくさんの人が

絵に触発されているいろいろなキーワードを出した。

そして、そのキーワードを手がかりにして、お互いの言葉に着目し、どこが同じでどこが異なっているか、目の前にある一枚の絵に関して、どのような言葉が「共有」されうるのか、ということをお互いのなかから探っていこうとしたが、この段階はなかなか難しかった。

これは進行の下手際なのかもしれないが、参加者同士がお互いの言葉に注目して、意見を交わすということができにくかった。一枚の絵に対して自分が感じたことから出発する、という設定が難しかったのか、奈良氏の絵の「喚起力」のせいなのか、自分の過去の経験を絵の中に見る人(「この絵は子供の頃のわたしだ、と感じる」という人)や、絵のなかの子ども(人物)に「共感」という人、自分や絵の人物の「感情」について話そうとする人が多かった。絵が何かをじっと見上げている「こども」の絵だったこともあって、(自分の子供時代のころのこと、大人や両親との関係など)絵にたいしてパーソナルな経験を重ねて見るひともいた。

そのせいもあって、相手の言葉に関わるということ(他人の意見についてとやかくいうこと)が、相手の経験やその相手そのものを肯定したり否定したりすることになってしまうことになると感じた

参加者もいたのかもしれない。とにかく「言葉」のレベルで相手に関わるという場面をなかなか作りだせなかった。絵を見てなんでもいいから感じたことを語る、ということが逆に参加者を不安にさせたのかもしれない。自分の経験を吐露するのも理論武装するのもなく、絵に「ずっと」入っていき、言葉を見つけることは、いきなり言われてもなかなか難しい。しかも相手の出した意見と自分の出した意見に言葉のレベルで関わりを見出すこと、その意味で「言葉を共有すること」は、議論の経験がない人には、いきなりは理解しがたい、演じがたいものだったのだろう。

議論の中程では、それまでに、いろいろな言葉が出たが、皆がそれを遠巻きに見守っている、という感じでどこか硬い雰囲気が残ったままだったような気がする。

いろいろ話を聞いているうちに、はじめに説明した「言葉を共有する」ということの意味がうまく伝わっていないということがわかった。言葉を「共有する」ということを、相手の意見に「共感」しなければならぬ、対話を一つのゴールに持っていかなければならない、ということだと受け取った参加者が何人かおり、「いろいろな意見があることはわかったが、自分の感じたことは変わらない」という人や、「色々な意見をひとつにまとめるのは強引だ」と進行に違和感を表明する参加者が現れた。そこで今回の目的は「共感」を無理してつくり出すことではなく、たがいの言葉に注目し、その言葉同士がどの点で同じで、どの点で異なっているかを議論すること、言葉を

「共有」することだ、と述べた。その時点でもう時間がなくなっていたので、せめてということで、テーマの絵に対する感想をもう一度、言葉にまとめてもらおうとしたが、これもなかなかうまくいかなかった。

私達の研究室では、この芸術作品にもとづくダイアローグをこれからさらに試みてみようとしており、また私自身は、来年度から始まる高校生を対象にした哲学の授業のなかにも取り入れてみたいと考えている。「感じたこと」からはじめるダイアローグが実現するには、もっとたくさんの方の進行の工夫が必要であることがわかったが、うまくいけば、専門家の「芸術批評」でも、分かる者同士の内輪話でもない、対話による(街角?!)「芸術批評」のようなものができるのではないかと考えている。

今回の「哲学カフェ」は、「哲学」という言葉に対する身構えがそうさせるのか)若干「硬い」雰囲気が残ってしまったが、そのことには、議論を進行する私達の態度や場所の雰囲気、ということも関係があるのだろう。「言葉を共有する」ための工夫はもちろん、「ガッコウ」モードではない)気軽に語れる雰囲気のところで開催する必要があるのかもしれない。

次回はぜひ、街なかのカフェで。

(たかはしあや)